

わたしは毛蟲を子どものために焼きすてる。
わたしは蝶を子どもをよろこばせるために翔ばせて置く。

八つ手

子供が自轉車から墜ちて、
顛あきに大きい痣をこさへた。

古い葉を落した庭の八つ手は蜿蜒として天に攀ぢる風情である。

南風。

雨を孕んで北上して來る南太平洋の低氣壓。

詩作法

ぼくは六月に樺太を旅行するつもりである。
オホツクの霧を吸つて來るつもりである。

年輪

私は今年四十歳になる。

とりいでて語るに足る思想といふものもなく、過去に遺した仕事といふほどのものも持たない。たゞいたづらに昨日を送り明日をむかへて来た私のやうなものにとつては、年齢とは単に肉體の上に記された年輪のやうなものに過ぎぬであらう。

人といふものは或は年齢なしに生活することも出来るかもしれない。なぜなら齡を加へるといふ考へは、自分でさう思ふよ

りも他人から年寄あつかひされてさういふふうに思ひ込むやうなことも人によつてはあり得るからである。四十不惑——私は今にしてこの言葉の眞實であることに氣づいてゐる。それは惑はざるをいふのでなく、惑ふことを知ることを指すのである。

風雅

風雅に遊ぶといふ言葉がある。この言葉が必ずしも現實からの完全な文學的或は藝術的脱離といふやうなことを意味しないのと同じく、芭蕉にも亦「子に飽くと申す人には花もなし」といふ句があつて、そこにはわが子を慈しむといふ人間本能の自然な發露をも一つの風雅の心で見ようとするやうな態度がうかがはれ、さういふ意味の風雅の心もかういふ人間本能の根源となんらかの意味で聯なり合ふのでなければ價值がないといふや

うな意向にもうけとれる。必ずしも現實の生活を鼓舞し鞭撻するだけが詩歌の目的でなく、さうだからといって、完全にそれから離れ去るといふことにもその能の盡きるものがないとすれば、いはゆる詩の所期とするところも或はこの無所着のあたらしい風流の一すちを押しつらぬくところにあるのではないかとも思はれる。

二人の友

萩原朝太郎は嘗て新詩風の擡頭に對する私の態度を臆病であるときめつけ、岸星は私を永遠の受験生だと言つて百田の苦笑を買つたと書いた。私はこの二人の先進のともだちの飾らない評言をうけ容れざるをえない。なぜならこの朝太郎の果敢さと岸星の洞察のそのいづれをも、私は自分に持ち合はせないからである。

五月の野花

「青神」佐藤惣之助著。

——このむしろ自失の責を作者自らが負はなければならぬほどの豊富な語彙。満喫の文學。五月の野花。

倫理と感傷

「測量船」三好達治著。

倫理にまで高められた感傷！ 總身に鍛ふ性得の深いリリースム！ 私は嘗てこの詩人について次のやうに述べたことがある。
——このわかい測量技師はめがねをあやまたないで経験の海にその錘つちを投げる。「私のやうに感傷のなかでしかうたへない詩人は……」と、この著者は何かの文章のなかで書いた。

私はこの詩人ほど「感傷を書くことを知つてゐる」詩人を知

らなく。

紙衾

詩といふものはどういふものであるかといふやうな面倒な問題を持ち出すよりも、人が詩と呼ぶもののなかから、さうでないと思はれるもの、詩的でないと思はれるものを片つばしから否定して行つた方が早手まはしではあるまいか。そのあとにどんなものが残るか。たとへば

枯れた藻端の下で、彼は紙衾のやうな裳で火の石をはたいて

ある神々をみつける。彼等は大きな靴を履いてゐる。多分それは私たちの村で縫つたものだらう。

と、柏木俊三はその「街のイデ」のなかで書く。

『檸檬』

梶井基次郎君が死んだ。牛込の若松町にゐた頃一二度あの顔で訪ねて来てくれたことがある。去年の秋、稲野の草深い田舎からくれた手紙の文字もまだ眼の前にある。

中央公論に載つたといふ小説はたうとう讀まずにしまつたが『檸檬』は古い燭臺や、刀劍や、甲冑やといつしよに、塵埃にまみれた古典的な文學作品のなかに燦然として新鮮に遺されるであらう。

乾直惠

『肋骨と蝶』 乾直惠。

乾君の詩集が出た。もつと早くに當然一冊の詩集を持つてゐてよい人の一人だ。私は自然のなかからこんなに美しい、そしてこんなに研ぎ澄まされた抒情詩を取り出すことの出来る詩人をあまり澤山知らない。さうだ、彼は取り出して来る。どんな上手な手品つかひも、この詩人のやうにそれを真似ることは出来ないだらう。なぜならこれは手品でなくて彼の詩だからであ

る。

彼はその詩の一つにみづから題してゐる——「肋骨を削ひ昇る蝶」と。誰がしかしこの作者の象牙のやうに蠟白な肋を削ふ蝶の宿命について知るだらうか。

『窄き門』の譯者に

——山内義雄君。

アンドレ・ジイド——寫眞を見てゐると、ジイドは君の父親のやうだね。さすがなうての山内義雄もこの親父の前では頭が
あがらないやうに見える。理づめの將棋といふのがあつたが、そ
れだから捜しても骨など手に觸らないこの親父は、少くとも君
にとつても苦手にがてであるにちがひない。

山内君、君の掌は大きいね。君はまるで、西洋人のやうに握

手する。しかしアンドレ・ジイドの掌はもつともつと大きいだ
らうね。いつか帝國ホテルで君がぼくの手に握らせてくれたボ
オル・クロオデルの手の感觸が、まだぼくの小さい掌のなかに
残つてゐる。ジイドの掌のひろさはまたそれともちがふだらう
ね。クロオデルはとても感覺的だつた。パタの塊りのやうでも
あつた。

ぼくはジイドの小説は殆ど（何もと言つた方がよいくらゐ）
読んでゐない。『ドストイェフスキイ』もまだ読んでゐない。『窄
き門』はしかし以前に新潮社本で讀んだことがあるやうな氣が
する。こんどの本も實をいふとまだ五分の一くらゐしか讀んで
ゐない。この本を貰つた頃から非常にいそがしい思ひをしてゐ

て、その五分の一に毎日のやうに惹かれながら、そのまま机の上に載せたままにしてゐる。しかしこの五分の一の讀過の印象は、こなひだの手紙にも書いた通り、ぼくに近頃でない清爽明朗な小説道への瞥見をおぼえさせた。ジイドの蜘蛛の絲は最後まで見透かしてゐるやうで、しかも次の頁への期待がこんなに自然に、こんなに必然的な力を持つて迫つて來る小説をぼくは殆ど知らない。そして君は、この本であまりにも鮮かにその近代的な、明朗な迷宮へのみちを解きほぐして行つてくれる。なみなみならぬ君の努力（この本は二度目の改譯だ）も、しかしこの本の頁ではいと樂々と、めだたぬ程度でぼくらを前の方へと引き出して行つてくれる。一つの「完成」をぼくはこの本

で讀む。

クロオデルではぼくは一つの合唱を聞いた。ジイドでは——君はたゞ一すぢの「完成」を心がけたのではなかつたか。おちついて、克明に、縫目なく、艶を消して。この努力は十分に酬はれてゐるやうに見える。いそがしい仕事も一通り片づいた。ぼくは君がいつか夜一どたづねて來てくれたことのあるこの二階のゆがんだ電気スタンドの下で、この近づいた年の瀬の一夜をゆつくり君のジイドにひたらせて貰はうと思つてゐる。ではよいお歳を。奥様にもよろしく。

三好達治

僕と『南窗集』の著者三好達治君との交誼はかなり以前に遡つて始まつてゐる。當時三好君は、梶井基次郎君、丸山薫君、飯島正君、淀野隆三君等と共に、『蒼空』といふ雑誌を刊行してゐた。まだ『日本詩人』が出てゐた頃だから、しかとは記憶せぬが、大正の終り頃であつたやうに思ふ。三好君が『蒼空』に書いた詩をほめた文章を『日本詩人』に寄稿した。その詩はたしか

母よ――

淡くかなしきもののふるなり

といふ美しい詩句に始まつた「乳母車」といふ詩集『測量船』の巻頭に收められてゐる詩である。「母よ 私の乳母車を押せ 泣きぬれる夕陽にむかつて 轆々と私の乳母車を押せ 赤い縋ある天鷲絨の帽子を つめたき額にかむらせよ 旅いそぐ鳥の列にも 季節は空を渡るなり」と、その中でこの詩人は歌つてゐる。

三好君が私の家をたづねてくれたのは、それから間もなくのことであつたか、それとも一年も経つてからのことであつたか

よく覚えてゐない。無論當時三好君は、まだ大學へ通つてゐた。はじめて逢つた時、三好君が大阪の幼年學校を出た軍人の子であることを知つた。

その頃の色の黒い三好君の口許にたたへられた微笑の色を私はまだハッキリと憶えてゐる。私はしかし當時もまだ三好君が詩を以て立つ人になるとは思つてゐなかつた。さういふ、その當時の詩人達が殆ど共通に持つてゐなかつた純粹な感情のフレキシビリテを三好君は貯へてゐた。私は三好君に會つて一人の詩人と知己になつたとは思はず、一人の人と知り合ひになつたといふ氣でゐた。

この三好君のなかだちで、偶然その當時の私の家の近くに住

んでゐた丸山薫君とも知り合ふやうになつた。そしてこの丸山君から、私はまた不思議な、さういふあたらしい詩の世界に觸れることができたのだ。この人もまたユニックであつた。ユニックといふ意味では或は三好君よりも丸山君の詩をまづ擧げなければならぬかもしれない。その丸山君の詩集も、數日前辻野君から近々出る運びになつたといふことを耳にして、大變よろこばしく思つてゐる。

三好君も丸山君も、私の、と同時に、私の家の、或は同時に私の女房や子供の友人であつた。今でも（病氣になる前頃）時たづねて来てくれる三好君は、最初に子供をみつめて、「お父さん、ゐるかい」と言つてはいつて来る。今度病氣になる數日

前にたづねて来てくれた時も、私は氣づかなかつたが、女房が三好さんの顔色が大變わるい、相變らずお酒を飲んでゐるのかしらと心配さうに言つてゐたが、それから間もなく、入院したといふ知らせを耳にした。

大學を出てからの三好君は窮乏の中からそれでもいろいろな仕事をやつてゐたが、三好君が今日見るやうないい人々のグループの中にあることに氣づいたのも、それから後のことだ。三好君が萩原朔太郎君に私淑してゐるのも尤ものことだと思ふ。たゞ萩原が日本の古典を觀るのと、三好のそれとの交渉にはだいぶ相違がある。少くとも三好君にはそれが内部的に存在してゐる。彼はそこから出て来る。その中から出て来てポオドレ

エルを咀嚼してゐる。三好君にとつては日本の古典は珍らしいものではない。また室生君のやうにその中にアグラをかく必要もない。三好君がこの二人の先輩達の間から出て来て、そして『測量船』を書き、『南窗集』をあらはしたことが、これらの詩集の眞の讀者に何よりその持ち物の素質をあきらかにしてゐると思ふ。「感傷の中でしか歌へない私」と三好君は述べてゐる。それでよい、彼にはさういはずしてよい。

私は三好君を傳統の詩人と呼ぶのは大して誤つてゐないと思ふ。たゞかういふ呼び名に對する解釋があまり狭いのだ。私は三好君に大いにこの傳統を破つて貰ひたい、そしてそれをもつと豊富にして貰ひたい。『測量船』を書いた三好君が、病間の作

とはいへ今日『南窗集』を公けにしたのは、私は三好君は期せずしてこの私の希望を實現してゐてくれるのだと思つてゐる。

『轉身の頌』を購ふ

高圓寺の古本屋で、日夏耿之介の『轉身の頌』を購つた。扉にNo. 8の書き入れがあり、下にHinazumiの署名もはいつてゐる。本はところどころ傷んでゐるが、紛ふ方もない日夏耿之介手版の初版本だ。

私は一體昔から他人の詩集といふものをあまり購つたことがない。近年よけいにさういふ習慣がついてしまつたが、この本を取上げたとき何故かこれは見遁せないといふやうな氣持にな

つた。この人とはしばらく逢はないが、高圓寺とはつい目と鼻の阿佐ヶ谷に住んでゐることも知つてゐる。朝夕の散歩にこの邊までやつて来て、この店頭に曝された自分のサインの入つてゐる最初の詩集を自分でみつけないともかぎるまい。それだけではない、もう一つ私がこの本に氣をとられたのはそのお終ひのページにいかにも商人らしい鉛筆の走り書きで、〇〇〇と書き入れてあるのを見つけたからだ。もしその書き入れが〇〇〇でなくて 5000 であつたなら、無論私はそれを購はうなどといふやうな考へは起さなかつたらう。古本の相場にはあまり通じてゐないが、日夏耿之介の初版『轉身の頌』が五十錢で賣買されてゐようとは、私には想像されない。無論これは何かの間違ひで

あらうが、間違ひであつたとしても、その値段を書き込まれてこの郊外の一古本屋の店頭にそれが店曝しになつてゐるといふことは動かせぬ事實だ。私は私が見つけたよいかをしようと思ひ、このちよつとしたセンチメンタルな氣持を吾と自分で珍重して見たくなつた。

日夏耿之介の倨傲不遜は有名である。それだけではない。彼はその著書の中で私の詩を批評して「拙劣」だと言ひきめてゐる。私の詩に對する誹謗惡罵は昔から少くないが、「拙劣」の一言で片づけたのは日夏耿之介一人だ。が、この眞向からの一太刀には私は確かに傷いた。いまでもその傷あとが額のどこかに残つてゐるやうな氣がする。

・翌日ある知合ひが来て「これは近頃掘出しものですね」と雑談のあとで眞面目な顔をして言つた。

ザボンよ、あをき梢に

—『抒情小曲集』について

『抒情小曲集』は室生犀星の二つ目の詩集である。その頃の古い詩集はたいてい散佚してしまつて、いまぼくの手許に残つてゐるのはこれ一冊だけである。

この本も、かつて一度ぼくの手を離れたのだが、不思議に地方にゐる一読者が、その土地の古本屋にならべられてゐたのを購ひとつて僕に送つてくれたのである。見返しに記された「謹呈百田宗治様 著者」の署名もそのまま残つてゐる。裏の方の

見返しには、その前に持つてゐた人が誰かに贈つたらしいサインの文字がはいつてゐる。背綴の一部が壊れて、どこやら疲れ切つたやうな、手垢にまみれた痕が残つてゐる。

日本の詩もある一時期、かうした不思議な發達の仕方をしたものだといふ感じが、この古い詩集を手にしてゐると、しみじみと胸裡に湧き出て来る。この詩集が嘗ての日もし何等かの新鮮な感激を詩の愛好者達に與へたとすれば、それは、單に一冊の印刷せられた詩集の與へるそれではなくて、もつと感覺的な手觸りのある、何か古い陶器のうちにひそむ古い日の光りをあたらしくみつけたとでもいふやうな——さういふ一種のひそかな耀かしさの故ではなかつたらうか。それほどにこの小さい、

今は古びてぼろぼろになつたこの詩集の装幀や、挿繪や、活字の配置や、およそ著者がこの本を纏めるときに使つたウエックな心づかひのあととが、その詩の内容と一緒に、離しがたいものとなつて今の吾々に感じられてくる。

實際にこれ等の詩は詩の正しい發展に添はぬ何物かをその中に藏つてゐる。蒲原有明氏の日本の近代詩への實質的な開眼がその後の幾曲折の後、かういふ一種變態的な抒情詩を産み出して、何か谿流の水を一箇所堰き止めたやうな觀を呈してゐる事實を、私はかぎりない深い興味で眺めることが出来る。そしてしかもその後の詩を作る若い人々にこれらの詩がどんな深い影響を與へたかを思ふと（さきに僕は變態的といふ言葉を使つた

が、それは或は獨自性と言ひ換へた方がいゝかも知れぬ。何故ならこれらの詩の與へた影響はこの作者のさういふ素質にもかかはらず非常に清新なものであつたから。この詩人のウニクな素質は十分尊重せられていゝものと僕は思ふ。

ザボンよ

あをき梢にむすべ

あたらしく『抒情小曲集』を読み返して、この句を僕は拾ひ出した。

詩集

古い詩集——といつても、そんなに昔のことをいふのではなし。せいぜい、三木露風の『廢園』とか、北原白秋の『邪宗門』とか、その他にも、室生の『愛の詩集』、『抒情小曲集』、それから萩原朔太郎の『月に吠える』、まだそのほか日夏耿之介の『轉身の頌』にしる、西條八十の『砂金』にしる、どこかにみな何か妙にくらい氣もちをたゞよはせてゐる。決して新鮮、明朗、颯爽といふやうなものでない。どこかに手垢にまみれたやうなと

ころがあり、これは今思ひ出すからでなく、たしかにその當時
それらの詩集たちはさういふ特質を同じ棚の上にならべられた
品物のやうに持つてゐた。

もつとも、これはそれらの詩集だけのことをいふのではない。
またその外觀や装幀や好みについてのみいふのでもない。さう
いふオブスキュアな特色を、當時の文學とか、詩とかは共通に
持つて、或は背負はされてゐたのである。これを詩に於ける自
然主義の壓搾時代と呼んでもいゝだらう。(だから、いまでもこ
れらの詩集の著者たちの書くものにはさういふ尻尾がどこかに
見えかくれしてゐる。)

が、今日出る詩集の、何と颯爽たることよ。何と新鮮潑刺た

ることよ。それらのものが手垢にまみれた古布子なら、これは
たしかに一枚のあたらしい手巾（ハンカチ）のやうに新鮮だ。また新しいコ
ンパクトのやうに馥郁としてゐる。

たとへていへば、竹中郁の『象牙海岸』はあたらしく輸入さ
れた葉巻の箱のやうであり（どこか硝子製の小ビルディングの
やうでもあり）、丸山薫の『帆、ランプ、鷗』はおしろい紙のや
うな馥郁さを撒き、安西冬衛の『亞細亞の鯨湖』に至つては、
上品なる夫人の懐る紙の麝香の香を放つがときものがある。

故人

故人について何か書くといふことは、たいていの場合感傷的になりやすいものである。故人の追憶に關する文章は例外なしに美しい。たとひそれがどんな悪文であらうとも。

吾々は死者に對する禮を守らねばならぬ。それが生ける日に於てと同じやうに。

生田君は船から身を投じた。この事實は、芥川龍之介の場合の方法と對照して、吾々に何かある深い暗示を與へるやうであ

る。

生田君が死の前に書いたものとして、新聞に發表されたものなかにこんな意味を述べたものがあつた。

即ち——余はいま甲板に立つてそこに掛けられた海圖を見てゐる。これは甚だ余の興味を惹く。普通の地圖は陸地には山嶽や河や町などの記號があつて甚だ賑やかであるけれども、海に屬する方は空白である。しかし余がいま見るものは陸地の方が空白であつて、海は航路だの潮流の關係だの記入で中々賑やかである。余がいま赴かうとする世界こそは賑やかに彩られてゐる。と。

無論これはその新聞を読んだ時の僕の記憶をたどつて書いた

もので、多少は意味が違つてゐるかも知れぬし、原文は更にもつと流麗で、僕が平々淡淡々と意味だけを辿つて書き流したやうなこんな悪文ではない。(ばかりでなく僕のいま述べようとする感銘がたゞ右に述べたやうな「意味」だけを主とするものでなく、生田君をしてその場合のその文章を書かせたある言外の迫るやうな氣魄の促進によるものであることはいふまでもあるま
5.)

この生田君の、最後の強いそして鮮やかな幻想は、ある何か身を襲ふやうな凄惨にちかい現實感を僕に與へた。僕はこの詩的といふべくんばあまりに乗りかかるやうな幻想的(ある點現實的)な錯覺のゆゑを以てこれを芥川の最後に近い日の述作に

比較して今更にその感傷性を擧げようとするものではない。

しかしながら、芥川の示した理智的な錯覺の世界の破綻に對して、生田君が直接にはイメージの世界に導かれた——ごとくに思はれるこの事實は、重ねて僕たちにまたある深い暗示を與へるもののやうである。

僕は生田君が最近に示した多くの作品にある興味を感じてゐた。生田君もまた僕の數年來の傾向に對して何等かの興味を持つもののごとくであつた。僕等はゆつくり話し合ふ機會がなかつたが、いつか正富氏のお祝ひの會で逢つたとき、(僕達は偶然にその時隣り合つて座を占めた)生田君は近々僕を訪ねると言つて詳しい道筋を僕に訊いた。僕もまた福士君を誘つて訪問す

ることを約した。僕は最近の生田君とゆつくり詩に就て語り合へることを楽しみにしてゐたが、その機会を遂に永く逸してしまつたことを甚だ遺憾に思ふ。

福士君は生田君の靈を叱ると言つたさうである。僕はその靈に向つてその赴いた世界の純一さをことほぎたい。これは敗れた人ではない、これは全うした人である。

詩人の怒り

詩人の怒りは理不盡であればあるほど眞剣である。それもまたその夢なのだから。しかしその夢のなかから手をさし出して人を打たうとすると、かれはいつも空を擲つてゐなくてはならないだらう。

椎の木一年

玄關の萩が散り、雨にきたなくなり、色あせて山茶花が咲き、炭を入れた床下の蟬が次第に小さくなる。

二度目の『椎の木』を計畫しはじめた頃の季節が一年振りまで返つて来る。十人も集まるかと思つた同人が、この頃では殖えに殖えて昔かない人も入ると六七十人の大家族になつた。

雑誌ばかりではない。本屋の眞似のやうなことを始めて、四つの詩集と四冊の本。それに『純粹詩論』と『マルドゥオル』

が近く市井に出る。ほんたうに足を踏み出して見なければ何も出来ない自分だが、この分だと來年は思はぬ横道などが眼のさきに現れて來さうな氣もする。

詩人の免狀を取上げられて、出版屋の鑑札が天から降りて來さうな氣もする。自分は原稿紙に書く代りに本に詩を書いてゐるつもりなのだ。

講演

背廣を着て、髭をはやした人たちが私を案内してくれる。私はボール箱でつくられた王様のやうな恰好をしてそのあとから歩きまはる。

——ここが廊下だ。ここが講堂だ。ここが運動場だ。

廊下の羽目板はところどころはづれてゐるし、あるくとインクの飛び散つた床板がキイキイ鳴る。これは昔からさうなのだ、私の小さかつた昔から。いや、そのすつと前の私の祖父の小さ

かつた時分から（寺子屋だつて学校だつて同じことだ）。壁には落書きがある。落書きをした生徒はきつと立たせられるのだ。さうだ、生徒はいつだつて立たせられるのだ。立たせられてゐるのが生徒なのだ。学校は辛いところだ。しかしその辛さが堆積して、時が経つて、たのしい思ひ出の場所になるのだ。たのしい？ 私はかりにたのしいとそれを書いて置く。さうか、さういふことが楽しいといふことなのか。

廊下が盡きると低い階段があつて、それを下りると、廁につづく剥げかゝつた漆喰ひの通路になる。その通路が、暗い、じめじめした廁の方へ私を連れてゆくのだ。廁！ 最もきたないしかし小さい生徒達にとつて最も必要な場所。行儀のわるい子

供達。しかし、行儀のわるいのは子供達でなくて神様なのかも知れぬ。そしていつも石炭酸のイヤなにほひ。小さい生徒だつた頃のことを思ひ出すと、しかしいつもこのにほひがつき纏ふのはどうしたことだ。これはイヤな匂ひではなくて、一番いゝ匂ひなのかしら、そして忘れ難い、なつかしい……。

背廣を着て髭を生やした人達が遠くの方から私を見てゐる。

私は一體誰なのだらう。この手首までの長いよごれた襦衣を着せられて、涙と墨汁で頬つべたを眞黒にし、破けた靴下から生身のまゝの足をはみ出して教壇の上に立たせられてゐる？ さうだ、多分今朝わたしは遅刻したのであらう。

氷島・暮春詩集・鉛筆詩集

旅行からかへつたら、三つの詩集が私を待ちかまへてゐた。いろいろの仕事に追はれて、毎日それらの書物の表紙ばかり見て過ごし、歸つて八日目の今日、はじめていくらか寛いでこの三冊の本を手に取り上げることができた。萩原朔太郎の『氷島』、阪本越郎の『暮春詩集』、室生犀星の『鉛筆詩集』。但し最後の室生犀星の詩集は『文藝林泉』と題された隨筆集のなかに『十九春詩集』と共に包含されてゐるもので、独立した著述ではない。

この三つの詩集の標題だけをならべて見たところでは、室生犀星の「鉛筆詩集」といふ標題が何よりも私には心憎くうけられた。この題だけを味はつて居れば本文は大して必要もないもののやうにさへ思はれる位、近頃の室生犀星にとつては詩とは畢竟一本の鉛筆に過ぎなく、また鉛筆のやうに離しがたく、鉛筆のやうに稚拙で素朴の精神を代表するもののやうに思はれてくる。

白い卵が七つあつた。

くりやの板の間にゆめがあつた。

卵がひとつづつ失くなつて行つた。

この詩人にあつては最早ひとつひとつの詩情を型どり斧鉞を加へる煩瑣も興味もなくなつて來たのであらう。感じるところに書き出され、拾ひ上げるところにえらばれて、おのづからの布置をとり結構を帯びてくるのが、その瓦礫をすべて珠玉に變ぜしめるこの詩人の生得の詩術なのであらう。それに較べると歌ふところは片鱗の「記録」であり、「日記」に過ぎなからうとも、「氷島」に示された萩原朔太郎の精神には老成愈々熾烈で果敢な虚無的咆哮が一陣の疾風のやうに全卷を掩ひ去つてゐるのを感じる。「すべての藝術的意圖と藝術的野心を廢棄し、單に心のままに自然の感動に任せて書いた」とこの詩人は言つてゐるが、それは嵐がこの詩人から羽や翼を奪ひ去つて、たゞ悲嘆す

る胴體だけをこの地上に遺し去つたのだと見ること出来る。
『青猫』から『萩原朔太郎詩集』の末尾の諧篇に仄見された現
實的な興味をこの詩人は再び捨て去つて、いまやまた最後の破
れた翼を遙かな天の一角にむかつて打振つてゐるのである。『氷
島』は萩原朔太郎の破れた（それ故一層完全な）浪漫主義の大
旗が大風に抗するやうに打振られてゐる。

あゝ汝 寂寥の人

悲しき落日の坂を登りて

意志なき斷崖を漂泊ひ行けど

いづこに家郷はあらざるべし。

汝の家郷は有らざるべし！

これは（著者自身も言つてゐるやうに）一つの歌だ。その大
旗の綻び目から漏れる生活否定の溜息だ。その氣魄の烈しい壯
大な表現に時代を超えたこの詩人の感傷的な浪漫主義がある。

『暮春詩集』は阪本越郎君の三つ目の詩集である。『暮春詩集』
の世界は『鉛筆詩集』の世界に近く、『氷島』の世界とは全く隔
絶してゐる。性情としてはこの詩人にもロマンティックな要素は
あるが、それを以て現實は裝飾してもそれと抗ふなどといふ意
志は微塵もない。祝日の國旗のやうに、この詩人にとつては憂
鬱も悲哀も朗らかであり詩の行使であるに過ぎない。

僕の友人はこの春に薔薇のやうな血を吐いた。それ故彼は夢得
帽子をかぶると大きな少女のやうにみえる。……

これはこの詩人の詩的なデタラメだらうか。しかしかういふ
詩句の書ける詩人を僕は新しい意味で詩の徳に浴してゐる人と
言ひたい。

この詩集の挿繪に藤田嗣治氏の繪を選んだのはこれは阪本越
郎の趣味なのであらう。しかし私などから見ると、やゝ神祕が
かつた、色のうつくしいルオーの繪などの方がもつとこの詩人
にびつたりするのではなからうか。

アミエルについて

Sさん。

お手紙をありがたうございました。ご返事をさし上げようと
思ひながら、何かとその日のことに追はれて、今日まで御無音
に過ぎてしまひました。

アミエルをお讀みになつてゐるといふこと、たいへんうれし
く思ひます。そればかりでなく、お手紙のなかにスウェデンボ
ルグの名前まで見出して一しほ深い知己を見出した氣がしてな

りません。

スウ・デンボルグは、もつといい譯者が得られたら更に美しい、立派な日本語の本になるだらうと思ひます。しかし鈴木氏のおの譯でスウ・デンボルグを読むのも愉快です。御参考までに小生の知つてゐるだけを挙げれば、スウ・デンボルグの本は『天界と地獄』のほか「神智と神愛」「新エルサレム」「神慮論」などが同じ鈴木氏の譯で以前に出てゐます。この中では、たしか丙午出版社から刊行された『新エルサレム』を簡単な本ですが、小生は愛讀したやうに記憶して居ります。まだお讀みになつてゐなければ御一讀を勧めます。どこかの古木屋の棚の隅にでも残つてゐるだらうと思ひます。

内容は正直にいふと全く忘れてしまひました。『天界と地獄』のやうなものでなく、もう少し自由な文章で書かれてゐたやうに（譯のせわかも知れませぬ）記憶します。

それからもう一つ、これはスウ・デンボルグでもアミエルでもありませんが、近頃讀んで興味を感じてゐるのはノヴァリスの感想（斷想）^{フラグメンツ}です。多分『青い花』といふ本のなかのものでせうが、倉田百三氏の編輯して居られる『生活者』に最近連載されてゐますが、仲々面白い。面白いといふだけではない、その神祕的な慧智——といふか、には深く射抜かれるやうなものを感じます。

さてアミエルですが、一語でいふと、小生はこのアミエルと

いふ人に、既に今日では歴史的事實としての一人の完全な「近代人」の典型を見出します。ヒロイズムといふものはどんな形でかいつの時代にも存在するものでせうが、アミエルに私などの見出すものはおよそその反対のものです。といふのは卑俗主義とか平凡主義とかいふ意味でなく、一種の非英雄主義——内質的には十分資格を持つてゐながら、性格として先天的に「英雄」たるの實行的な意力を缺いてゐる一つの人物の型を指すのです。

實行するといふことは實行するといふことそのことで既に一つの獨創であります。その意味ではアミエルは明確に獨創を缺いた人です。手足を持たなかつた人——持たなかつたのではな

い。自分が手足を持つかぎり、そしてそれを活用するかぎりでは、人の以外に出たいといふ非常に内氣な、それでゐて、止みがたい野心的な慾望、アミエルは高い教養と第一流といつてもよいほどの批評眼、見識を備へた人です。彼は一個の「教授」であればよかつたのですが、不幸にして彼はそれ以上に詩人であり、かつ音楽家であつたのです。鑑賞と創作といふことはこれを美學的に、或は心理的な過程から見るときはおよそ相反した性質のものやうですが、この種類の人間にはこの二つのものが非常な近似點をとるのです。そして彼の報告は鑑賞の過程を示すことに於て同時にそれは創作でさへもあり得るのです。アミエルの老大な生涯の日記は、それゆゑ表現を持たない文學

——素材それ自身によつて語られた詩といふことが出来ます。

同情には進歩がない(妙な言葉ですが)。つねに一切の事物やその關係に同情を失はない人は彼もまたそこに停つてゐるのです。同情されるものが寢臺の上に横になつてゐる病人である場合、同情するものもまたその病人が寢臺から下りる時までには同じ病人であるといへませう。

觀てゐるわけにはゆかない。私たちも生きなければなりません。粗暴でも、不完全でも、みつともよくななくても、逆だちをしてでも——そして生きるその瞬間から私たちの世界は一變するのです。いつの間にか自分が樂隊のなかにまぎれていつしよに足どりとつて行進してゐても——そして私たちがそれといつ

しよに行進し出した時にはもう滑稽な樂隊の姿を笑ふことは出来ないのです。

藝術家は今日では最早物を觀てゐる人ではないのです。彼が行進を始めるや否や、彼の藝術は風に唸りをはじめるのです。

アミエル風の心境にゐるかぎり人間は生きることが出来ません。一生を準備に終つて、田舎の宿屋の一室で過ごしてしまふやうなものです。小生はこのごろもうめつたにアミエルを讀みません。一びきの蜘蛛がそこに巢をはつて待つてゐるやうな氣がするのです。その巢にかゝつてはなりません。その巢にかゝつてはなりません。

車中記

名古屋を午後一時三十分の特急三等で發つた。

發車するとすぐ子供を浴衣に着かへさせ、生憎日蔭の窓際の席がなかつたので、日の當る方の窓の鎧戸を下ろして、その下へバットの箱を一つはさみ込んで風の通る工夫をした。

つくりつけの小さい卓をおろして、その上へおもちゃや繪本をならべ、子供の對手になりながら七時間半——久しぶりの東京！といつても、二箇月足らすの間留守にした東京

であるが、その前々日の朝大阪の停車場を發つ時から再びはつきりと眼に映り出した東京である。忘れてゐたわけではないが久しぶりの大阪での二箇月足らすの生活が、子供をさきに立てかうして歸つて行く自分たちには、何かあたらしい戰場へでも向かふやうなあらたまつた感激を持たせた。

新らしい戰場——しかしそれは希望に充ちて歸つて行く華々しい戰場では必ずしもない。東京は最早や文學的に自分にとつて一箇のあたらしい戰場ではない。そこにはたゞ生活があるだけだ。そこででなければ成り立たない私たちの生活があるだけだ。自分は必ずしも東京で生活することを願つてゐるのではないが、やはりそこへ行かねばならないのだ。自分自身のため、

自分と妻のため——そんな理由はどうでもよい、一人の子の親である自分には、目前の子供の生活を導くために目前の自分たちの生活を支へて行かねばならぬやうに強ひられてゐるのだ。自分たちは生きて行かねばならない。そしてそのために自分たちは東京に左様ならをいふことが出来ないのである。

思へば自分にとつて眞に文學への熱情を感じさせたものは、自分がまだ東京に出ない二十一、二歳から二十五、六歳までの間であつた。その頃私は自分で小さい雑誌を出し、不自由な生活費と生ぬるい環境のなかで燃えるやうな野心を内蔵しながら、日頃の昂奮を詩に書き、さうでない時は鼠のやうに眼を光らせて古典や翻譯書を探しまはり、それに読みふけてゐたのであつ

た。

私は必ずしも東京に出るといふやうなことを自分の文學上の所期とはしてゐなかつた。まさしく中途半端な翻譯書中毒に罹つてゐた私は、文字通りに日本の文壇といふものを輕蔑し、それを鵜呑みにしてゐたのであつた。世態人情のありのままを寫すことを以て私は決して文學だなどとは考へてゐなかつた。私の青年時代を養つた自然主義の文學は、理想としては私を納得させるものは持つてゐたけれども、自然主義の作家のその當時の作品などは少しも私を満足させなかつた。

詩を書くやうになると同時に、私はまた當時の詩人の作品にもこれと同じやうな不満足を感じた。私はリリズムといふも

のを輕蔑した。私は決して思想的な人間ではないが、何か深い思想的な背景を持つた文學——詩でなければ承知が出来なかつた。私の掌はひらかれてゐたから、私はそれを閉ぢさへすればいつでも立派に自分の仕事が出来すると思ひ込んでゐた。ひらかれてゐる掌には雲でも載せることが出来る。地球はおろかこの全宇宙も掌上のものとする事が出来るだらう。が、握り緊めた私の掌からは全宇宙どころか一片の雲も現れなかつた。

私が東京に出たのは二十八歳の春であつた。啄木は一握の砂にその後半生の據りどころを自ら見出したが、握りしめたこの青年時代の夢から私はたゞ自分自身のあはれなる破産をみつけただけであつた。私の東京での今日までの文學生活とは畢竟こ

の自分自身のみじめな破局をどうして自ら掩つたらよいかといふことに腐心することにかゝつてゐたのだと言つてよい。が一方で皮肉なことにその頃から文學が、或は文學らしいものには同時に三度の飯の種になつて行つたのであつた。文學とは（換言すれば）畢竟私にとつては腐肉の市場のやうなものであつた。生で新鮮な肉を嘗ては私も持つてゐたが、私はそれを自分で料理することができなかつた。私が庖丁にかけてそれを賣り出す頃にはそれはもう味も何もない古肉になりかはつてゐたのだ。文學上の理想はいかにともあれ、今日新鮮な自らの肉を殺ぎ、自らの肉を削つて文壇市場に提出することの出来る作家詩人を私は心から尊敬する。文學の價値は素より嚴格な作品價

値の上にあるのであらう。が今日の潑刺たるみづからの感情をその内容は如何ともあれ作品に盛りうる作家は讀むべきかなである。

文學者とは自分の着ものを脱いで賣り、自分の肌着を裂いて金に換へ、自分の血と肉とをさゝげて街頭に立つべきものだ。自らの肉を削り、自らの血を以て彩ることは、同時に他人の肉を削り、他人の血を以て彩ることも爲し得るものでなければならぬ。それを惧れるのは自分を惧れるのである。自分を惧れて何の文學であらう。

眞の文學者とは畢竟自らの文筆を衛るために生活する人である。自らの生活を衛るための文筆は文學の範圍には屬せぬであ

らう。私はそれを知つてゐる。そしてこの恥多い心を抱いて再びかの神聖なる（然り神聖なる）文壇の一隅にこの自分を置きに行くのである。

新しい戰場——しかし私はそこでいつたい何を闘ふべきかを知らない。私はたゞ廻轉して行く車の輪のひゞきが刻一刻私と瘦せた妻と、一人の子供を東京の方へ近づかせて行くことだけを知つてゐる。そして幾冊かの繪本と、いくつかの色新しい子供の玩具が眼のまへに竝べられてゐるのだけを見てゐる。爲さざるべからざることをする人のやうに、行かざるべからざるところに向かつて急ぐ人のやうに……

日暮が迫つて来る。まだ越さぬ箱根の山々の姿が次第に車窓

覺書

に近寄つて来る。

— 古い文章から

住吉文章

この章を初めに置くことを私は最後まで躊躇した。しかし「多
曉集」に出発する私の直前の姿にも觸れて置きたく、恥を忍んで
ここに付け加へたのである。或はこの一章（特にその前半）は全
然この詩集から省き去るべきものであつたかも知れない。

震災のあとで大阪に歸り、十三年の一月から翌年の春にかけて
府下住吉の路次の奥で書いたものの中から散文一篇、詩四篇、
それに句若干。この時期にはいろいろの事情から散文を多く書い
た（その大部分は昭和九年に厚生閣から出した『路次ぐらし』と

いふ隨筆集のなかにはいつてゐる）。「住吉文章」は當時の日記から
の抜萃である。

「爐邊」以下三篇の詩は十四年の春ふたたび上京して、しばらく
大森子母澤に假寓した頃の作品で、「日光浴」に出て来る家族はた
しか瑞西の公使の一家であつたやうに記憶する。毎日散歩の途中
その家の垣根の横を通り、ある朝一家をろつて日光浴をしてゐる
のを見かけてこの詩を書いたのである。これらの作品は、句と「住
吉文章」を省いて昭和二年十月に椎の木社から出した『偶成詩集』
のなかに收められてゐる。扉に入れた句は當時（大正十三年一月）
金澤に歸省してゐた室生犀星から寄せてきたもので、「君今年の冬
は寒からん」といふ前書きがあつた。

冬曉集

中野に移り住んでからの詩十八篇。このうち「陽目」から「何もない庭」に至る五篇と、「質素なる人生」は十四年十一月、「屋根」「冬」以下はすべて十五年一月の作品である。

「亜鉛張りの二軒長家で、夜ふけて外から歸つて來ると、家のうしろにそそり立つた一二本の裸木の梢が高い中空の寒月に刺をさし、その屋根根の上にしらじらと冷たいものが流れてゐた……（「冬隣——路次ぐらし）」と古い文章に書いた馬小屋のやうな二た間きりの住居であつた。ひとりでぼつねんと坐つてゐるうしろの柱でたえ入るやうにくさぜみの啼きだしたのもその家である。隣家には小さい女の子をつれた軍人の夫婦が住み、その人たちが轉任して行つたあとには職業もはつきりしない半島人の家族が越して來

たやうに憶える。

その頃私はいつも枕もとに一本の鉛筆と手帳を置いて寝た。「霜の強い凍りついた朝々がつづいたが、夜明けまへには必ず眼がさめ、その夢ともうつつともつかぬくらやみのなかで（前同）」手さぐりでかきつけたのが「鶴」その他の詩である。毎日菠薐草とアメリカ製のコンビーフを食べてゐた。

夕黄雲

「冬曉集」につづき、十五年の早春から五月頃までの間に書いたものを集めた。「冬曉集」と合はせて『何もない庭』（昭和二年三月椎の木社版）の大部分を占める作品である。「夕黄雲」「呪文」「ゆきずり」「鹽」「夕日」「寒木瓜」の六篇は當時の手帳から書き抜いてあ

らたにつけ加へた。「花臺屋」は『路次ぐらし』からひろつて入れた。

「叱る」に出て来る心臓の悪かつた甥はその後成人して大阪で一商賈となり、現に徴用を受けてゐる。

立木集

大正十五年（昭和元年）から翌年にかけて、やはり中野で書いたものである。『椎の木』を創刊したのは同年の十月で、創刊號には伊藤整、丸山薫、山本信雄、三好達治、飯島貞、長澤三郎などの諸君が書いてゐる。『雪明りの路』といふ詩集を出して北海道から上京して来た伊藤整君が笈をとき、大學の制服をつけて三好君が初めて訪ねて来たのもその上町の家であつた。三好君が紹介し

て、その近くでお母さんや妹さんと暮らしてゐた丸山君が、同じやうに制服をつけて、學校への行きがけや歸りに聲をかけて行つたのもその頃のことである。そこで長男曉見が生まれた。

このなかでは「信越國境」「朱澄いろの夕」「赤面鬼子」などが未發表の作品で、他は『冬花帖』（昭和三年厚生閣版）にはいつてゐる。

形代

牛込若松町の家に移つたのは昭和二年の初夏で、停留場のすぐ傍をはいった路次の奥にある文字通りの陋巷であつた。その年ちよつと大阪に歸つた（「詩作法」のなかの「車中記」はその時の所思）。

「幾本かの竹のほか、庭土の一隅に弱々しい秋海棠の新芽が偲ひ出てゐた。廂が田舎の家のやうに深く、庭の面はかつとした午後の陽光に照らし出されてゐたが、家のなかはいつも薄暗く、臺所の小窓からはいつて来る家裏の小路を傳つて来た濕つた風が一脈の水脈をひくやうに家のなかに吹き込んで来た。

子供たちが塀の外で遊んでゐる。その聲が手にとるやうにきこえる縁側を、わたしは自分の子供を抱へながらいつまでも往つたり來たりしてゐた。この家では夕暮は家の中からはじまる。外は夕焼けがして明かるいのに部屋の隅々には既にもう夜だ（「釘」——路次ぐらし）。

そこで、私は「雲」「朝日」「早魃」「秋日」「元旦」などの詩を書いた。「元旦」は『冬花帖』の初めに入れたが、ここに収めた方が原

作に近い。「梅」のもとの題は「餓死」であつた。このなかでは「一本の竹」「形代」「輪舞」「御矢師」「梅」「夕風」などが中野で書いたもので、他は若松町に移つてからの作であるやうにおぼえる。「前を見て歩いて行つた人」は芥川龍之介君の死に搏たれて書いた。

『椎の木』はその年の九月まで出して一應止めることにした。あとでまた復活させたが、第一期の『椎の木』は十一冊出しただけであつた。その家へは北川多彦君、梶井基次郎君なども來た。阪本越郎君も當時東大の學生であつた。

笛と聲

數篇の未發表の作品を除いて、この章の大部分は『ばいぶの中

の家族』(昭和六年金星堂版)にはいつてゐる。この詩集は春山行
夫君の編輯した『詩と詩論』を中心とした新散文運動の渦中に刊
行され、『冬花帖』の「餓死」「青空と宿命」等で一應行きつくした詩
境に一種藝術的な韻味といふやうなものを興へられた時期を代表
する。私としては大きい寄り道をしてゐたやうなものであるが
この身を以て行つた経験(或は冒險)は決して無駄なものではな
かつたやうである。詩に於ける主知の精神の效用といふやうなこ
とを學び、その後再び正しい「言葉」の世界に私を引き戻してく
れたのもこの寄り道のお蔭であつた。この時期の私の詩を萩原朔
太郎は「力學的抒情詩」と命名し、佐藤一英は、一つのデフォル
マン・ソンの世界であると指摘した。さらに伊藤整君はまた次のや
うな評語を加へた。「……この散文の詩の半數以上のものの中に人

は白いトルコ帽とニッカアボッカアの少年と、その笑と、行動と
失錯と、疑ひと、喜びとを見出して驚くに違ひない。そしてまた
今日までの詩の中でのそれの抜ひ方と、これらの詩篇との異つて
ゐる基礎は作者のイロニイの變化である。昨日までの詩で人々は
愛戀についての俗なサンチマンタリテを抹殺することは出来たが
なほ家族は、そして肉親は、その濃いベイントを塗られることな
しに文學に現れることが出来なかつたのだ。それを塗ることなし
にこの主題を文學に生かせる完全な例をこの詩集に見出したこと
が何よりも大きな私の感嘆であつた。——これは私の作品に對して
附加へられた評語としてよりも、むしろ一つの文學論として今も
なほ私の腦裡に残る言葉である。

この時期にまた友人の協力を得て『現代詩講座』全十卷(金星

堂版)の編纂を終へた。

詩作法

昭和七年の一月から、私は第二次とも呼ぶべき『椎の木』をまた出し始めた。その第一冊第二冊に名をつらねてゐる同人のなかには、前記の諸君のほか阿部保、左川ちか、山村酉之助、内田忠、内田克巳、山中富美子、吉田瑞穂、柏木俊三、草飼稔、太田咲太郎、瀧口武士、城小碓、佐藤義美、丹野正、高木恭造、西川満、一戸玲太郎、與田準一、江崎章子、饒正太郎などがあつた。ここに收めた散文は大部分この第二次の『椎の木』に連載したもので、後(昭和九年十月)自分の手で纏めて同じ題の小冊子として少数部数発行したもののなかからの抜萃である。その時々執筆したも

のであるから、隨筆ふうのものや、批評や感想のやうなものが雑多にはいつてゐるが、けつきよくは私自身の詩とその境涯に即して書かれて居り、作品を切り離しては考へられぬものであるから最後に一括して入れることにしたのである。「手紙」と「車中記」は執筆の時期が前後してゐるが、これは特に絶版の『路次ぐらし』から抜いて加へた。自分で描いた自分の肖像を振返つて見ようとするやうな興味以外に別に理由あつてのことではない。

昭和十八年五月

著者略歴

明治二十六年一月大阪市に生まる。高等小學校を卒業したるのみ、他に學歴なし。大正四年詩集「最初の一人」を自費刊行後著書多し。詩はおほむね「現代詩人全集」中の「百田宗治集（昭和五年新潮社版）に收めらる。

詩集 蓬萊 奥附

會員番號
一三七〇一六

昭和十八年八月廿五月初版印刷
昭和十八年九月一日初版發行

（三千部）

定價 金二圓
特別行爲稅並常費金七錢

合計金二圓〇七錢

出版會承認
い 10150號



著者

百田 宗治

發行者

村田 鐵三郎

印刷者

石崎 宋一

發行所

東京都麹町區丸ノ内三丁目八番地
有光社

配給元

日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

振替東京六六六一五番
電話丸ノ内二〇〇七四番

1-225-51

詩集歴史 少國民のために 一・三〇

日本出版文化協會推薦

子供の世界 兒童文化の諸問題 一・九〇

百田宗治著

有光社版

25

終

